

学校から始める持続可能な社会の創り手の育成
～Well-being の実現を目指して～

東京都立国際高等学校

家庭科 伊東純子

1.はじめに

消費者教育とは、消費者の自立を支援するために行われる消費生活に関する教育及びこれに準ずる啓発活動であり、消費生活に関する知識を修得し、これを適切な行動に結び付けることができる実践的な能力が育まれることを旨として行われなければならない¹⁾。そして、知識と行動の間には、考察、判断があり、学校における消費者教育では、この知識修得、考察、判断、行動までを扱うものと考える。

家庭科は生活全般を学びの対象とし、一人ひとりの生徒が自分らしく幸せな人生を歩むために学ぶ教科である。令和4年度より年次進行でスタートした新学習指導要領では、その前文に「持続可能な社会の創り手となることができるようになる」とある。私は高等学校家庭科教員として、生徒にどのような社会を創るのか、そのために自分は何をするべきなのかを考え、仲間と共に協働し、持続可能な社会を設計する力、そのために行動する力を身につけてほしいと考えている。また、教師が知識を伝える授業は大変効率が良く、深い考察のためには、広い視野や知識が必要であることは間違いない。それでも、予測できない変化の中を生きる生徒にとって必要なのは、ゴールを定め、そこに到達するまでの道筋を見極め、着実に歩み続ける力²⁾である。生徒自身がゴールを定め、様々な活動を通して、自分にもできことがある、自分の行動で未来は変わる、持続可能な社会の創り手の一人として主体的に行動したいと考えてほしい。

これらのことから、私は学校における消費者教育を、生徒が目指すべき未来社会のあり方を考え、他者との協働を通して、未来社会の創り手としての自覚を高め、新たな行動を体験できるように、計画・実践したいと考えている。

2.授業計画

未来社会は私達の日々の選択、行動の積み重ねで決まる。消費行動は単なる経済活動ではなく、「投票」「社会参加」である。生徒には、学校生活を通して、エージェンシーを育み、どのように社会、世界と関わり、どのように生きるか、より良い社会の実現のために自分に何ができるのかを考え、定めた目標に向かって行動する力を身に着けてほしい。そして、私は、消費者教育を通して、生徒には知識や法律、制度等を活用し、自分自身の生活を守る力と持続可能でより良い未来社会の設計者としての自覚とそのための実践力を育みたいと考えている。

授業を通して、生徒がエージェンシーを育み、それぞれのラーニング・コンパスを得るために、授業を計画する際、次のような点を考慮した。

- ① 新しい行動を体験する。
- ② ゴール及びそこまでの道筋を生徒が決定する。
- ③ 講座単位でそれぞれの行動、実践を共有し、各講座の行動、実践は教員が他クラスに伝えたり、

SNSで共有したりする。

これらを踏まえた授業実践から、次の3点を提言する。

3. 提言

提言1 自ら設定したゴールに向けての能動的・主体的な学びの実現

これからの消費者教育では、生徒自身が自らゴールを設定し、ゴールに到達するための道筋を仲間とともに探し、実践、やり遂げる形を取ることが重要だと考える。「教えられた」ではなく、「自ら道を切り開き、実践し、ゴールにたどり着いた」と生徒に実感させることが必要である。目指すべきゴールの設定時には、ある程度の教員の介入が必要であるが、あくまでも生徒が「自ら設定した」と考えるように配慮する。

学習指導要領に定められた家庭科で取り上げる項目の一つに「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」がある。ホームプロジェクトは、自らが家庭生活の中で課題を発見し、解決のための実践的活動に取り組むという課題解決型の学びであり、学校家庭クラブ活動は学校生活、地域等の課題に対して仲間とともに解決に向けて取り組む活動となる。本校では、ここ数年学校家庭クラブ活動の一環として、プラスチック使用量の削減活動に取り組んでいる。関心がある、解決したいと考える社会的課題は何かというアンケートの結果、海洋プラスチックゴミ問題、マイクロプラスチック問題を挙げる生徒が多かったことから始まった取り組みである。大量消費社会からの脱却を目指し、消費の在り方や目指すべき循環型社会について考察、実践した。時系列で事例を紹介する。

事例1 マイバッグ・マイボトルデーの設定

最初の取り組みである。「プラスチック使用量の削減のために、みんなでできることは何か」をテーマに案を出し合った。「全員で取り組む」ことを一つの条件とした結果、「マイバッグ・マイボトルデー」を設定し、この日はプラスチック製のレジ袋は使わずにマイバッグを利用する、ペットボトル飲料は買わずに水筒を持参することになった。仲間意識が強いクラスであったこともあり、忘れる生徒は一人もおらず、全員で実践することができた。全員での実践は1日だけだったものの、一度通学カバンに入れたマイバッグは、そのまま使っている、簡単にできるので続けたい等の声が寄せられ、リーダーの生徒には大きな達成感があったようだ。時代の流れもあり、現在は、多くの生徒が水筒、マイバッグを日常的に持参している。



図1 マイバッグ・マイボトルデー

事例2 プラスチック製クリアファイルを紙製ファイルに

本校では、学校説明会等で学校案内をプラスチック製のクリアファイルに入れて配布していた。毎年、約1000人の中学生がこのプラスチック製クリアファイルを手にする。そこで、プラスチック使用量削減のために、このプラスチック製クリアファイルを紙製ファイルに切り替える活動に取り組んだ。生徒達はまず紙製ファイルを作っている会社を調べ、Webサイトを比較検討し、3つの会社を選んだ。それぞれの会社にサンプルを申し込み、2社のサンプルを手に入れた。実際に使用し、耐久性等を確認し、費用、印刷方法等を比較、検討し、商品を選んだ。

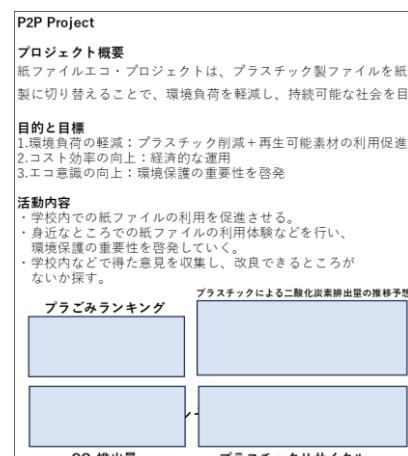


図2 プレゼンテーション資料

そして、校長にプレゼンテーションをし、導入が決定された。図2は、プレゼンテーションのために生徒が作った資料である。P2Pとは「Plastic to(two) Paper」を意味する。この活動において、生徒たちは情報を集め、比較、検討、判断し、解決策を他者に伝え、環境に影響が少ない新たな「商品」を選び、創りあげた。本校では、今年度の学校説明会からプラスチック製クリアファイルではなく、紙製ファイルに学校案内を入れて中学生に配布を始めた。地球をイメージさせる球に校章が描かれ、これを大切に抱えている子どもというデザインは生徒が描いたものである。

事例3 プラスチック(なるべく)ゼロ生活への挑戦

これはある生徒がホームプロジェクトとして取り組んだテーマを学校家庭クラブ活動としてやってみたという挑戦である。動画³⁾、新聞記事⁴⁾等を参考にプラスチック(なるべく)ゼロ生活に挑戦し、意見交換をし、振り返りをした。生徒が記した振り返りの中から何人かの意見を抜粋する。

- ・ 「プラスチック(なるべく)ゼロ生活」はやっぱり不便です。しかし、これは人間が作り出した大問題であり、利便性を犠牲にしても、それを解決するのは私たちの責任だと思います。私たちはすでに、地球とそこにいる私たち自身を含む生命に、プラスチックが及ぼす恐ろしい影響を目にしています。プラスチックの使用を減らすことは、単なる提案ではなく、必須事項です。
- ・ 私たち一人ひとりの小さな選択が、地球の未来を守る力になると信じている。
- ・ 便利さだけに流されず、環境への負荷を考えて行動することが必要であり、私たち一人ひとりの選択が社会全体の需要や企業の姿勢を変えていく力になると考えました。
- ・ 自分だけいきなり生活を変えるのは難しいと思うので家族と一緒に取り組もうと思いました。家族の中で指摘し合いながら地球の環境のために少しでも行動したいです。
- ・ 問題を放ったらかしにするのではなく、プラスチックがなかった時代からヒントを得たり、新素材など新たな発明に切り出したりと、より慎重にかつダイナミックに一人ひとりが意識して問題に向き合っていく必要があると考えた。
- ・ 未来の地球を守るために、便利さを重視するのではなく、未来の環境を少しでも守れる選択をする、素材を変えるという小さな一歩が、社会全体を大きく変える力になるのではないかと思う。
- ・ 意見交換をする中で、すでにプラスチックを使わない、環境に優しい商品が開発されて世に出ていることも知った。
- ・ 私は、多くの物が他の人と共同で使えるシェア制度に変わればプラスチックの削減に繋がると思いました。

現代社会において、プラスチック(なるべく)ゼロ生活は困難であった。多くの生徒は、使い捨てのプラスチック製品は選ばない、プラスチックの代替となる製品を積極的に使う、長く使う、正しく捨てる等の行動を選択していた。振り返りからは、他者の取り組みを知り、新しい視点を得、学びを深めたこと、問題点を見極め、取るべき行動、新しい行動について考察、実践したことが伺える。

このようなゴールを目指し、自分で道筋を選んで行動した経験は、エージェンシーの育成に結びつくと考えている。そして、生徒たちは、確かに「日々の選択が未来社会を創る」ことを認識した。そのためにどの



図2 紙製ファイル

ように行動するか、その行動を継続するためにはどうすべきか等が次の課題である。

提言2 世代間でつながる消費者教育の実現 / 消費者教育の担い手の育成

消費者教育は、それぞれが取り組んで終わりにすべきではない。他者への発表の機会が大切である。高校生にとって級友の実践、行動はとても刺激的だ。彼が、彼女がやっているなら自分にもできる、やってみようと考える生徒がいる。先輩の活動には畏敬の念を抱き、同じことを、それ以上のことをやりたいと考えようだ。校内での継続的な取り組みには、受け入れられやすいという面もある。さらに、本校には、SDGs ゴールの達成に向けて高校時代から継続的に活動している卒業生が何人かおり、彼らの活動を紹介した新聞記事⁵⁾等を取り上げると生徒の意欲は顕著に高まる。高校生にとって身近な人の取り組みは、主体的な行動を促す大きな要因となる。そして、活動を校外へと広げていくことも大切だ。校外へと発信することで、生徒は消費者教育の担い手としての自覚を強くもつ。現在、学生を対象とする SDGs や未来社会に関するコンクールはたくさんある。これらのコンクールに挑戦、参加することも一つの方法であろう。本校ではこれまで、研究発表会での発表、コンクールへの挑戦、児童館等でのワークショップ、新聞への投書、インスタグラムでの発信等に取り組んできた。ワークショップで、「みんなにもできることがある」「一緒にやろう」と伝えることで、生徒自身が消費者教育の担い手となり、更に次世代の消費教育の担い手の育成にもつながる。このことは生徒にも伝えている。そして、行動を言語化することで、生徒の思考は整理され、深まる。この時、教員は、発表の場や方法を提案し、生徒の行動を促し、待つのみである。提言1で取り上げた取り組みも校外発表をし、他校の生徒に「プラスチック製クリアファイルを紙製ファイルに切り替えよう」と呼びかけた。まさに、生徒は消費者教育の担い手であった。

提言3 生涯学習者としての自覚と相談力の育成

予測できない社会を生き抜く生徒たちには、生涯学習者であるという自覚が必要である。問題ある商法一つとってもその手口は進化し続けており、安全、安心な生活を送るためにも、生涯学習者でなくてはならない。生涯学習者としての自覚を有する者は、安全、安心、幸せな生活、Well-being を実現できるのである。グローバル化が進んだ現代社会では、「世界に配慮した選択」が求められる。そのためにもそれが生涯学習者としての自覚を有することは不可欠である。生涯学習者として、自ら学び続ける意欲や習慣を身につけるためには、「社会は、世界は変わり続ける、進化するという認識を有する」、「課題を見つけ、解決のために活動し、発表・共有することで得られる達成感を知っている」ことが不可欠である。そのために、授業に法律や制度の変遷、成立の背景等歴史的視点を取り込むようにしている。学びの可視化にも効果があると考える。課題解決型学習の発表の機会を複数回設けることが望ましい。さらに、相談する力の育成も大切である。一人で解決するよりも専門家のアドバイスを受けながら対処する方が効率的で間違いもない。そして、消費生活センターに相談することで、例えば問題ある商法の新しい手口を伝えることになるかもしれない。このような考え方には相談のハードルを下げる面もある。解約したい契約について、消費生活センターに電話をかけて相談をするというロールプレイも一度やっておくと、生徒はいざという時に行動に移しやすいと考えている。

4. おわりに

これから消費教育では、一人ひとりが生涯学習者としての自覚を持ちつつ、自分自身も消費者教育の担い手の一人であり、次世代の人材育成にも責任があると考え、より良い社会の構築のために、仲間とともに行動できるようになることが求められている。多面的・多角的視点から SDGs ゴールの実現に向けた行動力も必要である。そのために、学校教育においては、一人ひとりがラーニング・コンパスをもち、ゴールを設定し、そこにたどりつくための道を見極め、多くの人とともにそれが Well-being を実現するために協働、行動する力を育成したい。教育に携わる一人として、主体的、能動的な学びを通して、生徒のエージェンシーを育み、持続可能な社会の設計者としての自覚を高めること、そして次世代の消費者教育の担い手を育成することに尽力したい。

- 1) 消費者教育の推進に関する法律 URL: <https://laws.e-gov.go.jp/law/424AC0100000061> (R7.8.24 閲覧)
- 2) 白井 俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房 2020
- 3) PLASTIC OCEAN URL: https://www.youtube.com/watch?v=ju_2NuK5O-E
ヒトの血液中にも…マイクロプラスチックの影響は?
URL:<https://www.youtube.com/watch?v=AjIyy7GvUsM>
- 4) 「脱プラ生活」山あり谷あり5日間 記者が挑戦、ルール「使い捨てプラのごみを出さない」
朝日新聞朝刊 2024 年 8 月 10 日
お弁当にもトレカにも 日本の使い捨てプラ 朝日新聞夕刊 2025 年 6 月 26 日
「使い捨て」やめる 産業システムの再設計 朝日新聞夕刊 2025 年 7 月 3 日
幽霊漁具 海の命奪う「わな」 朝日新聞夕刊 2025 年 9 月 22 日
- 5) 目標達成へ 若者を意思決定の場に 朝日新聞朝刊 2024 年 9 月 30 日

審査委員長のコメント

生徒の主体的な行動を促す取り組みは極めて秀逸であり、提言内容がすでに学校現場で実現できている点は目を見張るものがある。Well-being の実現を目指す教育実践には強く共感する。今後は、単なる活動報告にとどまらず、他校でも活用可能な汎用性のある提言へと構成を工夫することで、この優れた実践が全国へ広く波及することを強く望む。